



コルネリオ会

(防衛関係キリスト者の会)

ニュースレタ - No.127

2011年10月



「2011 Interaction Mongolia」参加記

コルネリオ会員 芝 祐治

1 始めに

昨年、空自幹部学校に入校されていた韓国留学生の紹介でコルネリオ会を知り、それ以来本会で活動してきたところですが、モンゴルにて開催された「Interaction」へ今回初めて参加してきましたので、その概要を皆様に報告します。

今回の「Interaction」は、日本・韓国・中国・カザフスタン・キルギスタン・モンゴル・ニュージーランド・台湾・アメリカの9カ国のMCF等からの参加により、平成23年8月24日から28日の5日間、モンゴルの首都ウランバートルにあるチンギスハーン国際空港から10kmほど離れた、モンゴリカホテル&リゾートにて行われました。

私はこれまで海外への渡航歴はなく、今回が初めての海外渡航となりました。また期間中、使用言語は全て英語（現地の言葉は支援者（現地で働かれているモンゴル人牧師）による逐次通訳）で行われました。

また、一人での参加ということに戸惑いましたが、それでも大変有意義な経験をすることができ、参加を勧めてくださった会の皆様に感謝しています。

2 初日

いよいよ出発、自宅から成田空港へ。機材到着が遅れ、また空港周辺が豪雨に見舞われたことから、約2時間ほど離陸が遅れましたが、離陸後は順調に飛行を続け、初のモンゴルへ無事到着しました。

ホテルまでの道すがら、あまりの道路事情の悪さに右側通行であるはずにも関わらず、車は左右へ機敏に動き続け、まるでちょっとしたラリーのようでした。

それに慣れると道ばたに点在する、初めて見る本物

のゲル（移動式の組み立て住宅）や遙か向こうに見える山々に感動しているうちに、小さな市街地を抜けて会場のホテルに到着しました。

私のルームメイトは現地のモンゴル人牧師でした。出国前は1人部屋ということを知られており、案内された時点では素性の分からない初対面の外国人が同室ということで、かなりの不安がありました。そこでクレームを言えるほどの会話能力があるわけでもなく、多くの不安を抱えたまま最初の夜を過ごすことになりました。（結果としては様々な話を聞くことができ、おまけに最終日には彼の尽力で、より空港に近い市内に泊まることができたのでした。）

3 Interaction 1日目

1日目は「Inductive Bible Study: 帰納的聖書学習」と題された聖書学習法を英語で学びました。要は、「限られた時間の中での（軍隊内での）聖書学習をどう準備し、どう導くか」ということを自分が導く立場になって考える、と理解しました。途中、記述式の部分もありましたが、説明される内容と資料をなんとか聞き（読み）こなし、仕上げることはできたのはちょっとした自信につながりました。皆での昼食の時間を挟んで午後は各国の現状紹介でした。今までほとんど接したことのない各国の現状について触れることができたことは、今後の信仰生活において大きな刺激となり、また糧となりました。また、国によっては弾圧を受けている国もあり、実際そのために今回参加できないとのことでした。その国の体制と、人々のために祈り続けたいと思います。

4 Interaction 2日目

2日目は「Conversational Prayer: 会話的祈り」について学びました。両日の講義（実習）を通じて再確認したのですが、聖書を学び、自分自身の課題について祈る、もしくは祈りあうことは信仰生活の基礎中の基礎です。祈り方についてより実践的なものを学ぶことができました。特に小グループでの「学び」と「祈り」を導くことの重要性と実際的な方法論を学ぶことができたことは大きな収穫でした。学んだ方法論に基づき各グループで選んだ課題について祈りあうという時間があり、このグループが、「日本(1)・韓国(1)・中国(2)・台湾(1)・アメリカ(2) ()は人数」で当初は英語での祈りでしたが、意思の疎通が途中で難しくなり、結局それぞれの言葉で祈るということになりました。英語はともかく、中国語と韓国語はわかりませんでしたが、終わった後、なぜか通ずるものがあったような気がするのなぜでしょうか。

5 Interaction 3日目

やっと周りの人とのコミュニケーションが取れだしたかと思うところで、Interactionの内容としては最終日です。「証し」を書き、それを発表するというものでした。日本語で組み立て、たどたどしい英語で発表するという、大いに冷や汗をかく経験でしたが、発表後のグループ皆の笑顔が忘れられません。

全日程を終了し、昼食後は市内観光です。ホテル、空港からウランバートル市街地に入り、途中、道を行く人々や町中の様子に目を奪われていると、また草原地帯へ。しばらく走り続けると巨大なチンギスハーンのマニユメントがあるテーマパークに到着しました。辺りは広大な草原、しかしその中に見たことのない大きさのステンレス製の馬に乗ったチンギスハーン。あまりのギャップに驚くばかりでした。マニユメントの下部は博物館になっており、我々の来訪の2日前に開館したとのことでした。その後、市内へ戻り伝統衣装に身を包んだ男女のショーを観覧し、興奮冷めやらぬ中ホテルへ戻りました。

6 最終日

日曜日、そして最終日。午前中は皆で礼拝をし、名残惜しさの中、いよいよ別れの時です。初日では考えられない大胆さでそれぞれの参加者と挨拶をし、再会

を誓いました。本来であればそのままホテルに泊まり、翌日の早朝ホテルから送迎してもらうこととなっていたのですが、前述の牧師が、私のもう少し市内を見たいという要望を聞いてくれたうえ、彼の関係するNPOの宿泊施設を世話してくれることになり、甘えることにしました。ホテル出発後、彼とA兄と共に現地MCFの事務所、「ザイサン・トルゴイ」という記念碑（市内を見下ろすことができる丘の上にある）牧師の教会を見学させていただきました。

7 帰国～最後に

A兄運転の車で宿舎を5時半に出発し、6時過ぎには空港へ。手荷物検査の機器に異常があり1時間ほど出発が遅延しましたが、混雑の中待たされた代償か、その分出国審査はあっという間に順調に終わり、成田へ無事到着しました。

...本当に大変貴重な経験をさせていただきました。現地での愛する兄姉の心温まるもてなしと交わりに感謝しています。この経験を糧とし、今後もコルネリオ会会員として奉仕して参りたいと思います。ありがとうございました。



集合写真



下「学び」風景（筆者左端）

東日本大震災に派遣されて

会員 加瀬典文

1 はじめに

私は、東日本大震災災害派遣の命令を受け、5月21日から約2週間、空自災害復旧支援隊(以下「隊」と略)の一員として活動を行ってきました。

隊の活動内容は、行方不明者捜索及び瓦礫撤去、給食給水支援、入浴支援、物流管理支援そして松島基地の基地機能復旧です。発災から2ヶ月、一時は千名を数えた隊も850名態勢となっていました。私は現場で汗水流して働いたわけではなく、調整・統括をしていただけですが、しばしばの現場進出時に得られた事柄を私見を交えてお伝えします。

2 石巻市での活動

松島基地東側の石巻市。地平線まで瓦礫と化したあまりの光景に心が停止してしまい、何の思いも浮かびませんでした。しかし間もなく、ここでたくさんの方が亡くなってしまったこと、生き残ったが今も困難な状況にいる人々がいること、そして、何の被害も受けずにこのこと来た自分がここにいることの対比に、悲しみに似た感情を抱きました。大きな大きな出来事を前に、一端の英雄気取りで来た自分の愚かな小ささを感じたのかもしれない。

隊は、報道にもよく出てくる焼けこげた門脇小学校の近くで重機を使った瓦礫撤去作業を行っていました。岩手県山田町での任務を終えてからやってきた者達もあり、その忍耐力には頭が下がりました。その1人から興味深い話を聞きました。4月7日に大きな余震がありましたが、山田町で陣頭指揮をとっていた特科連隊長が、阪神大震災の経験からそれを予見し、4月7日は自衛隊は活動しない、地元の皆さんも注意するべきだと発言していたというのです。神がかり的な人もいるものですが、地震を予見しても、それを公言して実際に対応をとるという決心は普通ではないと感じました。

陸自は石巻総合運動公園に大規模な前進兵站基地を設営し、関連活動に我々の隊も参加していましたが、陸自と空自の摩擦が起き、統合運用の難しさを感じました。隊は陸自の統制に従っていたのですが、

待機時間が長かったり、現場で活動内容が変更されたりすることに苦情が出ていました。陸自の文化は予め準備した装備でとりあえず移動、駐屯地を設営、現地確認後に活動を開始するので到着後の待機時間がありますが、空自は瞬時に移動(航空機が主体)速攻活動して即戻る文化なのです。私達はある時、意を決して後方支援連隊長にその件を言いました。「わかりました。ただ陸自の文化も理解してほしい。」との弁でした。翌日、陸自計画担当者は2階級上の人となり、現場指揮官も違う人になり、待機時間も無くなりました。私は前任者のことが気にかかりましたが、その対応に驚きました。

山田の件も石巻の件も、大人数の人を動かす陸自には、空自にはいない人材がいるものだと感じ入りました。現場では決してその名を知られない人々の活躍があるものです。神様は人を使って地上をおさめていることをおぼえます。

3 東松島市鳴瀬地区での活動

松島基地の西側、東松島市鳴瀬地区。全域の海拔が低く津波により全てが消失してしまい、石巻市が瓦礫の山となっていたのと極めて対照的です。日本三景松島の北、「奥松島」と呼ばれ独特の景観を有する地域であるだけに、人の手に成った町が消え去った風景は自然の力を前にした人間の無力さを際立たせていました。

東名という運河があり、家、車、神社までもが、この運河に落とされていました。一定間隔で堰き止め排水し、行方不明者捜索を行った上で、家、車などの瓦礫を撤去、撤去後さらに捜索を行い、元に戻すという自衛隊の活動で、隊は行方不明者捜索に参加していました。排水した後でも、膝から腰くらいまでは水があるので、ゴム製胴長姿です。また、運河だけでなく、近くの鳴瀬川河口付近でも捜索を行いました。こちらは堰き止めることができず、引き潮時に実施。水深は1.5mはあり、所により顔だけが出るようなこともありました。しかも流れがあります。命綱を持ちながらの危険な活動でした。一人

でも多くの行方不明者の発見を望む地元の気持ちに応えるべく、困難な状況を前に隊員たちの士気はこの上なく高まりましたが、私は安全確保に神経を使いました。キリスト者なのに、神にもすがるといいうのを改めて実感したところです。

そんな折り、現場指揮官からある上申がなされました。本来ならば退けた方が良かったのですが、彼らの本気の目を見て、私は黙って頷いたことがあります。その後神に祈り続けました。彼らが無事に戻り、達成感に満ちた目を見た時、そこに言葉は要りませんでした。私達のような者にこそ信仰が必要であることを感じた時でした。

4 活動をふりかえって

反省すべきは、「いつも喜んでいなさい、絶えず祈りなさい、全ての事に感謝しなさい」とのみことばを忘れていたことです。確かに祈りはしましたが、前述のように困った時の神頼みみたいなのがありました。喜びも感謝も足りなく、驚き怪しむことの方が多かったと思います。

私達はこの震災に意味を求めようとしがちです。しかし、全ては神の御手の中にあることです。日本は過去何百年、いや何千何万年もの間、災害を受け続けてきました。その度に日本人は立ち直り、団結力や助け合い、忍耐力、勤勉などを養ってきたのだと思います。天災は日本人にとって神が定められた宿命なのでしょう。

普通なら、「最後に亡くなった方々のご冥福を祈り…」と結ぶのかもしれませんがキリスト者としてそうしません。かつて私は松島基地勤務だったことがあり、その時も震度6強の宮城県北部地震に遭遇しました。被災した妻と娘は避難所や知人宅等を転々とした生活を送りました。そんな中、石巻の友人知人かなり助けていただいたのですが、その方々のうち1人のお名前が、亡くなった方のリストにありました。残念ながらその方は主を信じてはいなかったそうです。私達を助けてくれた人が減ってしまったのです。私にはみことばを伝える任務があるということのを改めて感じました。

どうか主にある者皆に神様の導きがありますように。

修養会に参加して

会員 檜原 菜都子

私は教会の夏の修養会に集い、自分という存在は、進化論の言うサルから進化した存在ではなく、創造主が最高傑作として創られた被造物であることを確認させていただきました。

また、創造主からの指示を受けるため、そして創造主への信仰告白を告白するために「ことば」が与えられたことを確認させていただきました。

創造主からの指示には、「はい。かしこまりました。アーメン」と神のみ前にて信仰を告白します。

父なる神が2千年前に被造物・人間の世界に、人間の罪の赦しを求めためにお遣わしになった御子イエスキリストについてもそうです。

昇天されたイエスキリストに父なる神のみもとにつく時までの主にある信仰をもって、個人の判断や保身をゆだねていくことができますように。

さらに、御子イエスキリストへの信仰に導かれる聖霊なる神を確信して信仰告白することが重要であると思います。すなわち、信仰告白をしつつ歩ませただくのみでございます。

一足一足主にすがり、絶えず絶えずこの者に伴われる御霊に従い、創造主のご支配、ご計画の中で歩ませていただきとうございます。

主にありて

献金感謝 (2011.4.1-2011.9.30)

いつもコルネリオ会を覚えていただき感謝致します
松山暁賢、舟喜晃子、今市宗雄・敬子、須藤義照、
石川信隆、伊藤忠臣、玉井左源太、圓林栄喜、
山下和雄

(編集子)

徳梅陽介先生のご子息(敬謙君)の病が癒されるようお祈りください。

芝兄が211 interaction Mongolで多くの恵みを受けて帰って来られました。今後の歩みの上にも祝福をお祈りください。